

国内外における養鶏のアニマルウェルフェアに関する動向 ～イタリアの肉用鶏、米国・カナダの採卵鶏の近況から～

(株)イシイ代表取締役社長 竹内 正博

1. 海外の肉用鶏と採卵鶏の飼養システム

1. 1 イタリアでの肉用鶏のAW対応

今回も南欧でのアニマルウェルフェア(AW)に対応した肉用鶏農場の近況を報告したい。

2026年5月にイタリアで3棟の鶏舎を所有する肉用鶏農場を視察する機会があった。築1年半の肉用鶏農場の鶏舎(写真1)は、サイズ2331平方メートル(126メートル×18・5メートル)。飼養羽数は4万7500羽で、出荷日齢が平均45日、中抜き出荷しており、



写真1 肉用鶏鶏舎

1回目(30日)、2回目(38日)になっていた。

AWへの対応としては、鶏舎内に止まりパイプ(写真2)が設置されており、25日齢以後にはブロック状のワラも設置することである。



写真2 AW付帯設備「止まりパイプ」

た。イタリアの夏は高温多湿のため、飼養期間中に敷料攪拌機(写真3)を2回使って敷料を改善している。

過去3年間に視察した3カ国の肉用鶏農場は大型鶏舎という共通点があった。2024年6月に訪問

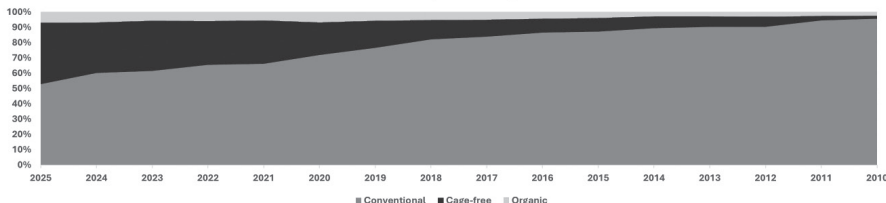


写真3 敷料攪拌機

したポルトガルの鶏舎は2000平方メートルで飼養羽数4万羽。2025年5月に訪問したデンマークの鶏舎は、2800平方メートルで飼養羽数5万8000羽。今回訪問したイタリアの鶏舎は2331平

	2025	2024	2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2010
Total U.S. Cage-free Flock(%):	47.1	39.9	38.5	34.4	33.9	28.1	23.4	17.8	16.0	13.4	12.7	10.7	9.7	9.6	5.4	4.4
Layers(millions)	142.8	121.3	123.9	106	111.1	91.7	79.7	59.9	52.4	42.9	37.3	33.2	29.6	28.3	15.2	12.2
Organic(%):	6.9	6.7	5.7	5.9	5.5	6.7	5.7	5.1	4.9	4.4	3.9	2.8	2.7	2.9	2.6	2.2
Organic Layers(millions)	21.0	20.3	18.5	18.2	18.2	21.8	19.4	17.0	16.0	13.9	11.4	8.7	8.2	8.5	7.4	6.1
Traditional Cage-Free(%):	40.2	33.2	32.8	28.5	28.4	21.4	17.7	12.8	11.1	9.1	8.9	7.8	7.0	6.7	2.8	2.2
Cage-free Layers(millions)	121.8	101	105.4	88.0	92.9	69.9	60.3	42.9	36.4	29.0	26	24.5	21.4	19.8	7.8	6.1

Cage-free statistics, USDA January 2026



資料1 ケージフリー統計(USDA)

方メートルで飼養羽数4万7500羽であった。欧州の最新肉用鶏農場の鶏舎サイズは2000〜3000平方メートルで、飼養羽数も4万〜6万羽と大型化している。また、どの鶏舎にもAW対応の止まり木(又はパイプ)とブロック状のワラが設置されていた。

1. 2 米国での採卵鶏の飼養システム

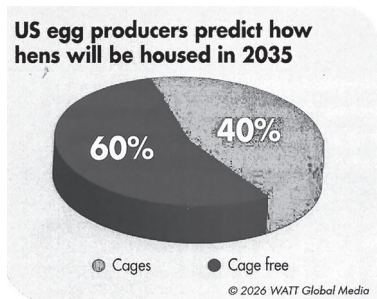
米国の採卵鶏の飼養システムはどうなっているのだろうか? ケージフリーの現状と将来について語る前に、飼養システムの転換期について触れたい。転換期は2013年に連邦法案のエッグビルが成立しなかったことで、米国採卵鶏業界はケージフリー方向に進むことになった。

2011年7月7日にUEP (United Egg

Producers)とHUS (米国動物愛護協会: The Humane Society of the United States)はエッグビルの成立に向け、2億8000万羽のすべての産卵鶏のために、包括的な新しい連邦法の制定に向けて協同で取り組むという前例のない合意を公表していた。この案では、2030年までにエンリッチドケージを義務化し、従来型の採卵鶏のバッテリーケージを段階的に禁止して、エンリッチドケージへの転換を進めるものであった。もしエッグビルが制定されていれば、家畜の取り扱いに対処する初めての連邦法になるはずだった。

2010年の米国におけるケージフリー飼養の割合は4.4%(オーガニック2.2%を含む)であったが、2025年における米国の採卵鶏飼養システムの割合は、ケージフリー47.1%(オーガニック6.9%を含む)、ケージ52.9%(エンリッチドケージ1%未満を含む)となっている(資料1)。

www.WATTPoultry.comによると、2035年の米国のケージフリー飼養の割合は60%になると予測されている(資料2)。



資料2 米国の2035年ケージフリー割合予測 (www.WATTPoultry.com January 2026)

1. 3 カナダでの採卵鶏の飼養システム

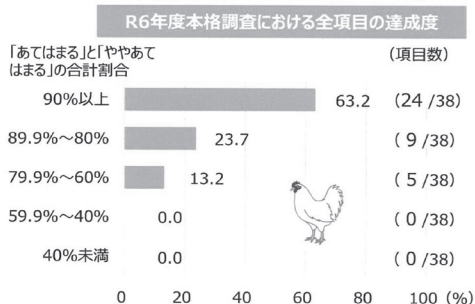
2016年にEFC (カナダ鶏卵生産者協会: Egg Farmers of Canada)が、2036年までにバッテリーケージを禁止すると発表した。採卵鶏飼養システムは従来のバッテリーケージから新たな方式(エンリッチドケージ、ケージフリー(エイビアリ、平飼、フリーレンジ等)に移行することになる。

2026年6月29日のWATTPoultryに掲載されたMeredith Dawson氏の記事 (<https://www.wattagnet.com/eggs/news/15828776/scorecard-tracks-cagefree-progress-in->

1（5）具体的な目標（農林水産省案） 採卵鶏

【検討会での意見】

- ・ 全体的な方向性に基づく目標設定とする。
- ・ 業界として推進を図っている「換羽処理における給餌方法」について、戸数の回答割合ではなく羽数に基づく評価の必要性について言及あり。
- ・ 給餌に対しては、飼料メーカーの協力が必要不可欠であり、生産者のみならず関係者一丸で取り組む環境づくりが必要。



項目	現状値 (R6)	目標値 (R12)
1日1回以上、鶏の飼養環境や健康状態を確認し、飼養管理に関する記録をつけている。	88.7% (70.8%)	90%
ピークトリミングは、痛みを最小限に抑え、必要最小限の部分のみを取り除いている。	98.8% (91.7%)	現状維持
換羽処理の際、24時間以上の絶食は行わないようにしている。	63.0% (26.4%)	73%
換羽処理の際、常に飲水可能としている。	99.1% (97.3%)	現状維持
ケージ飼養では、飼料及び水の摂取が可能で、自然な姿勢で移動したり姿勢を正常に調整したりできるような飼養密度としている。	93.4% (66.9%)	現状維持
チェックリスト等を用いるなど、アニマルウェルフェアの観点で定期的に飼養管理の現状を確認している。	70.9% (41.3%)	81%
災害による影響を可能な限り小さく抑えるため、危機管理マニュアル等を整備している。	73.4% (51.0%)	90%

※「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計割合。() は「あてはまる」のみ。

資料3 採卵鶏の達成目標

canada?utm_source=Omeda&utm_medium>Email&utm_content=NL-Egg+Industry+Insight&utm_campaign=NL-Egg+Industry+Insight_20260701_0700) によると、カナダのケージフリー割合は21%になっている。

2026年1月に米国のアトラントで開催されたIPPE(国際生産博覧会: International Production & Processing)で、筆者はカナダでの採卵鶏の飼養システムについて情報収集を行った。加工施設機械メーカーの話によると、飼養割合79%のバッテリーケージを使用している生産者のうち、エンリッチドケージへの変更が75%、ケージフリーへの変更が25%となると予想していた。この予想が正しければ、2036年におけるカナダの予想採卵鶏飼養システム割合は、ケージフリー41%(21% + (100% - 21%) × 0.25%)、エンリッチドケージ59%となる。

麻布大学動物資源経済学研究室の2025年6月18日に発表した「ケージフリー採卵養鶏 実態調査」報告 (<https://lab-navi.azabu-u.ac.jp/va-10/49b77db57f3e32a173b5>

c7f3be8e7f3.pdf) によると、国内ではケージフリー飼養羽数の割合は約3・17%(約2826万羽中90万羽)と報告されているが、カナダの生産者の半数以上が飼養システムとしてエンリッチドケージを選択すると予想されていることは、日本国内の採卵業界には大変に参考になると思われる。2026年9月に筆者はカナダのEFC、採卵農場、ブロイラー農場を訪問する予定である。鶏卵肉情報誌2027年1月号にカナダの採卵鶏と肉用鶏のAWについて近況報告が出来ると思っている。

2. AWに関する第6回意見交換会

2.1 AWに関する飼養管理指針(AW指針)の実施

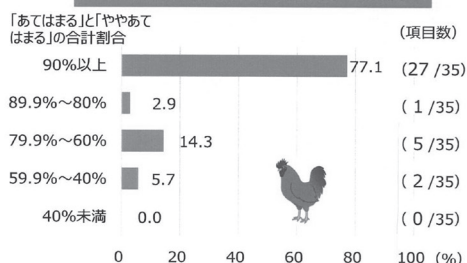
2024年10月に農林水産省畜産局畜産振興課は個体識別システム活用班(AW担当)の名称を変更し「アニマルウェルフェア推進班(AW推進班)」を設け、2023年7月に発出した畜種別AW指針の実施状況をモニタリングし、補助事業のクロスコンプライアンスの対象とするな

1（5）具体的な目標（農林水産省案） 肉用鶏

【検討会での意見】

- ・採卵鶏同様、羽数に基づく評価の必要性が示されたものの、全体的な方向性に基づく目標設定とする。
- ・輸送の外部委託における条件にアニマルウェルフェアへの配慮事項が盛り込まれているかについて、契約書の内容のみで実作業を判断できない可能性について言及あり。

R6年度本格調査における全項目の達成度



項目	現状値 (R6)	目標値 (R12)
1日1回以上、鶏の飼養環境や健康状態を確認し、飼養管理に関する記録をつけている。	99.7% (99.0%)	現状維持
ピークトリミングは、痛みを最小限に抑え、必要最小限の部分のみを取り除いている。	100% (97.1%)	現状維持
食鳥処理前は、輸送等の時間も考慮した上で、過度に長時間の絶食は行わないようにしている。	99.7% (98.3%)	現状維持
同じ鶏群の全ての鶏に対し、正常な姿勢をとる等のために十分な空間を与えている。	90.0% (83.8%)	現状維持
鶏のストレスを低減し、通常の行動等のため、暗期を適切に設けている。	60.1% (55.6%)	71%
チェックリスト等を用いるなど、アニマルウェルフェアの観点で定期的に飼養管理の現状を確認している。	53.8% (43.2%)	64%
災害による影響を可能な限り小さく抑えるため、危機管理マニュアル等を整備している。	69.8% (57.0%)	90%
輸送を外部に委託する際に、委託条件の中にアニマルウェルフェアへの配慮や丁寧な取扱いに関する事項が盛り込まれている。	44.9% (25.8%)	55%

※「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計割合。()は「あてはまる」のみ。

15

資料4 肉用鶏の達成目標

ど、AWの普及・推進を進めている。AW指針の内容は、各畜種ごとの飼育管理等について【実施が推奨される事項 (should)】と【将来的な実施が推奨される事項 (desirable)】を明確にしている。

農林水産省は、2026年6月1日に「第6回アニマルウェルフェアに関する意見交換会」を開催し、AW指針の「実施が奨励される事項」の達成目標の設定を取り上げた。意見交換会は非公開だったが、議事概要と会議資料は https://www.maff.go.jp/chikusan/sinko/animal_welfare_iken.html に公開されている。

2. 2AW指針の達成目標

意見交換会では2025年10月～2026年3月にかけて開催された「達成目標年の設定に係る検討会」による検討結果の概要が報告された。目標の全体的な方向性として、(1) 達成の水準は、「あてはまる計」が90%に達することを最終的な目標の「達成」水準として、すでに「あてはまる計」が90%以上の項目については、90%以上を維持しつつ、「あてはまる」の割合向上を目指す。(2)

「あてはまる計」が80%未満の項目については、現状から10%の向上を暫定目標とする。(3) 設定の期間は、食料・農業・農村基本計画等の見直し時期とタイミングを揃え、5年間ごとの目標設定を基本とすることが示された。

また、具体的な目標としては、持続的な経営を図る上で基礎となる項目であり重点的に取り組むものとして(1) AWに関する知識の取得、(2) 危機管理マニュアル等の整備、(3) 危機管理マニュアル等の関係者間共有、(4) 自然災害等の影響に備える事前対策の実施については畜種統一で早期の「達成」を目指すこと等が示された。具体的な採卵鶏と肉用鶏の目標（農林水産省案）については、資料3と資料4をご覧ください。

今後、農林水産省から正式に目標値が発表されれば、AW指針の内容がクロスコンプライアンス、畜産クラスター事業など今後の補助金交付にも影響すると考えられ、養鶏関係者は示された目標値の達成に取り組むことになる。

2. 3 筆者のコメント

委員である筆者は残念ながら海外出張のために第6回意見交換会を欠席したが、事務局は提出した3つのコメントを会議で読み上げてくれた。筆者が話したかったのは、今後の達成目標の検討において【将来的な実施が推奨される事項 (desirable)】をどのように扱っていくかということである。将来的な実施が奨励される事項は大変に困難な課題であるが、AWでは避けては通れないものであり、さまざまな議論が必要だと考えている。

AW指針の内容は、各畜種ごとの飼養管理等の中で【将来的な実施が推奨される事項 (desirable)】を明確にしている。例えば、肉用鶏では、ひなが地面に直接触れず、砂浴びおよびつばみを促すため、ほぐれて乾燥した敷料を提供することが望ましいとしている。肉用鶏は床で一日中飼養されるので、敷料がAWにとって大変に重要である。一方、採卵鶏では2つある。1つは飼養空間、もう1つは付帯設備である。飼養空間では、良好な筋骨格の健康および羽の状態に貢献する運動および快適

な行動の発現のために、十分な空間を提供することが望ましいとしている。付帯設備には、砂浴びや、つばみ、営巢のエリアおよび止まり木がある。砂浴びを促すため、砕けやすく、乾燥した床質へアクセスできること、また、つばみ行動を促す床質や、止まり木へアクセスできることが望ましいとしている。

3. まとめ

欧州では肉用鶏鶏舎の大型化、多数羽飼育が進んできたがAWの対応としてエンリッチ資材の導入がきちんと行われている。米国では採卵鶏の飼養システムではケージフリー化が進んでいるが、カナダのようにエンリッチドケージに進むという動きもあり、ケージフリー化が若干鈍ってきた感がある。

日本国内では農林水産省がAW指針に関する事項の目標設定に向け作業を進めており、生産者も今後のAWの取り組みを進める必要がある。